HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	規則とアスペクト : 『哲学探究』 第II部からの展開
Author(s)	野矢, 茂樹
Citation	北海道大學文學部紀要, 36(2), 95-135
Issue Date	1988-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33523
Type	departmental bulletin paper
File Information	36(2)_PR95-135.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

規則とアスペクト

――『哲学探究』第Ⅱ部からの展開――

野矢茂樹

言語を用いているとき、われわれはなんらかの言語規則に従っている。それは疑う余地がない。だが、どこかに言語規則なるものがあり、あるいはそれを暗記しており、それを参照しつつ、かく話し、かく書いているわけではない。規則なるものが存在するのではなく、「規則に従う」と呼ばれる行動の様式があるにすぎない。では、それはある種の行動のパターンなのであろうか。そうではないと思われる。というのも、行動のパターンの調査から結論できることは、その行動のなんらかの「規則性」でしかないからである。「規則的に振舞う」ことと「規則に従っている」こととは概念として区別されねばならない。さらに、その規則的な振舞いがすべて因果的に引き起こされたものであるとされるならば、それはむしろそのものが規則に従っているということを排除することになるだろう。例えば、惑星は確かに規則的な運動を示してはいるが、だからといって惑星は「規則に従って」そう運動しているわけではない。それゆえむしろ問いはこう立てられるだろう。「たんに規則的に行動することと、規則に従うこととはどこが違うのか」。もはやこれは行動のパターンの探求によって答えられる問いではない。ならば、「どこ」と問われてわれわ

れは「どこ」を探せばよいのだろうか。

この問題に向かわされた者の最初の反応は、「心の中」を引っ張り出してくることだろう。外的行動のパターンの差異で答えることができないのならば、行動に随伴する内的な心的状態に目を向けるしかあるまい、と考えるのである。これに対して、「心の中」という概念を分析することによって（そのときわれわれは再び、心は「どこ」にあるかと問うことになる）根本的に応答することもできようが、とりあえずこう問い返すことで十分だろう。「言葉を話しているとき、あなたは本当に自分が言語規則に従っているという意識をもっているか」、と。おそらく誰しも、自分が語ろうとしている内容の方に心を奪われており、むしろ言語に対する意識は、その本性上、姿を現わしていないのである。

ここにおいてわれわれは完全なアポリアに陥ったようにみえる。というのも、外もだめ内もだめというのであれば、もはや手のうちようがないように思われるからである。本稿は、この状況の中で、「アスペクト」概念の可能性を探ろうとするものに他ならない。それはきわめて大雑把に言えば「見方」に類した概念であるが、そのような概念が「規則に従う」ことにとっての鍵を成すことを示したいのである。

この「アスペクト」という概念は、まず知覚における概念（〈…として見る〉）であり、われわれはこれをウィトゲンシュタインの内に見出す。だが、この概念は従来誤解を受けていた。すなわち、ひとつの新しい知覚論を示すものであるかのように読まれていたのである。それゆえ、本稿はまず新しいアスペクト解釈を提出するところから始めねばならない（第一節）。その新しいアスペクト解釈のもとで、初めて、ウィトゲンシュタインが「規則に従う」という場面においてアスペクトという概念を論じていることが分かるようになる。そこでわれわれは、〈意味盲〉という、

ウィトゲンシュタインが〈アスペクト盲〉に対応するものとして提出した概念の解釈を通じて、ウィトゲンシュタインの議論の内実を明らかにするよう試みねばならない（第二節）。ウィトゲンシュタインがそこで執拗に問うていることは、一言で言えば、「言語使用にとってアスペクト的体験の重要性は何か」に他ならない。そして、言語使用という場面でアスペクト的体験を欠いている者を〈意味盲〉と呼び、「意味盲は何を失うことになるのか」と問うのである。本稿は、従来明らかにされていなかったこうしたウィトゲンシュタインの議論の解釈を通じ、まさにこの問いを自らの問題として受け継ぐ。だが、受け継がれるのはそこまでであり、その問いに対する答えはウィトゲンシュタインに反したものとなるだろう。ウィトゲンシュタインはある個所で、「意味盲はたいしたものを失わない」と答え、全体としてもその方向に傾いているように思われるのであるが、本稿はまさにその逆、「意味盲は言語使用にとって決定的なものを失う」と答えたいからである。すなわち、意味盲は規範性を失っているというのが本稿の結論となる（第三節以降）。

ともあれ、われわれはまず、ウィトゲンシュタインからアスペクト概念を正しく読みとっていくという作業から始めねばならない。

1

「アスペクト」という概念は『哲学探究』（以下たんに『探究』）の第Ⅱ部（およびそれに関わるさまざまな手稿）において現われる概念であり、それは〈…として見る〉という言い方で捉えられている。ところが、この、〈…として見る〉という言い方の語法に関して、ひとつの流布した見解がある。彼らは、「われわれはすべてを何かとして見るの

である」、と主張する。例えば、「私はこれを机として見る」、のように。（われわれはこれを「知覚の理論負荷性理論」と呼べるだろう）。なるほど、異なる文化のもとなどではこれをベッドに見たり、祭壇に見たりする者もいようから、そのような言い方も可能ではあろう。そしてまた、彼らの言わんとすることも誤りとは言えない。確かに知覚はすでに意味を孕んでおり、「理論と解釈は見ることの内に初めから『ある』[1]」。そして、この知覚対象における意味的契機を〈…として〉という言葉で言い表わそうというのである。だが、これは〈…として見る〉という言い方に対する彼らの約定に他ならない。すなわち、ひとつの知覚理論と結びついた特殊な哲学専門用語なのである。

ところが悪いことに、この哲学語法の出所をウィトゲンシュタインに帰す一般的了解が見られる。そうして、『探究』の第Ⅱ部はひとつの知覚理論として読まれ[2]、あるいはゲシュタルト心理学に対するコメンタリーであると読まれることになる[3]。かくして、「規則に従う」ということを中心概念として展開されてきた第Ⅰ部の議論が、第Ⅱ部に入って知覚論に転じたかのような印象を与え、第Ⅰ部と第Ⅱ部は決定的に分裂してしまうのである。

アスペクトを巡るウィトゲンシュタインの議論が知覚の理論負荷性を扱ったものではないということの検討は、すでに別稿において論じてあるので[4]、ここでは要点のみに留めることにするが、ポイントは二つある。まず第一に、ウィトゲンシュタインが〈…として見る〉という言い方を取り上げるのは、あくまでも〈…を見る〉との対照においてであるという点があげられる。そして、〈…として見る〉を知覚一般の構造と考え、すべてを〈…として見る〉に帰することにならざるをえないような議論を為す者は、この対照を正当に捉えることができないだろう。第二に、何かを何かとして見ることのできない者をウィトゲンシュタインは〈アスペクト盲〉と呼ぶが、目下の解釈に従うと〈…として見る〉が成立しえないということはすなわち知覚一般の崩壊であり、いっさいが混沌に帰すことに他なら

ない。だがそれに反して、ウィトゲンシュタインは、アスペクト盲がわれわれと比べてたいしたものを失なっているわけではないと考えているように思われる。[5] 明らかに、目下の解釈はウィトゲンシュタインのこのような態度を説明することができない。このようなことから、われわれは、知覚の理論負荷性理論を『探究』第Ⅱ部に帰す解釈には無理があると結論せざるをえないのである。

では、アスペクトという概念でウィトゲンシュタインは何を問題にしていたのだろうか。鍵はまさに、〈…として見る〉と〈…を見る〉のコントラストにある。ウィトゲンシュタインのここでの課題は、〈…として見る〉と〈…を見る〉の文法上の差異、とくに〈…として見る〉という言い方のもつ含意は何か、を問うことであった。そしてそのように問題が立てられるならば、それに対して「すべての知覚は〈…として見る〉である」と答えたとしても、それは明らかにまったく事実に反するものとなっているだろう。実際、日常われわれが用いる知覚の言葉は〈…として見る〉ではなく、ほとんどが〈…を見る〉の方なのである。われわれは、「何を見ているんだ」と尋ねられ、ごくふつうに「机を見ている」等のように答える。誰も「机として見ている」などと答えはしない。では、われわれはどのようなときに〈…として見る〉という語り方をするのだろうか。われわれはいったいいつ、「机を見る」のではなく、「机として見る」のか。

〈…として見る〉という言い方がごくすなおに用いられる格好の事例が、反転図形によって与えられる。例えばあひる-うさぎの図形を考えよう。このような場合、われわれは、「私はいまこれをあひるとして見ている」といった言い方をする。ここでポイントは、そこにおいて私は図形の反転の可能性を知っており、だからこそそのように答える、という点にある。「Aとして見る」は「他の見え方もあるが、いまはそのようには見えない」、という含意をもっ

ているだろう。逆に、先の机の場合には、私はそれが他の見え方をするということをまったく意識しておらず、それゆえ、たんに「机を見る」と答えたわけである。――「それが変化するときのみ、われわれはアスペクトを意識する」(*RPP*. I, § 1034)。アスペクトという概念にとって、この、「変化の可能性」あるいは「他の選択肢の存在」というポイントは本質的な重要性をもっているのである。

だが、アスペクトが変化するとき、いったい何が変化したのであろうか。もちろん図形そのものが変化したのではない。ここにはあひるの図形とうさぎの図形という数的に異なるふたつの物があるわけではない。それはけっして物ではなく、簡単に言えば「見方」が変化したのである。あひるがうさぎに反転したとき、われわれはそこで物のレベルでの変身譚を語らず、自らの見方が変化したと考えるのである。では、その「見方の違い」とは何なのだろうか。それに対するひとつの雑な答え方は、その図形に対する見る者の態度、構えの違い、扱い方の違いを指摘することであろう。ここにおいて、例えば「この木片を飛車として使おう」といった言い方と〈…として見る〉との類縁性が明らかになる。われわれはこのような言い方で、「その木片を将棋というゲームにおいて『飛車』が担う規則のもとに扱う」ということを表明する。同様に、「あひるとして見る」という言い方は、その図形に対するわれわれの「把握の仕方(Auffassung)の表現、(したがって、扱い方(Behadlungsweise)の表現であり、ある技法(Technik)の表現なのである)」(*RPP*. I, § 1025)。すなわち、〈…として見る〉とは、それをいかなる文法(Grammatik)、いかなる内的連関性(interne Relation)のもとに見るかということを表明する言い方だと考えられるのである。

それに対して、〈…を見る〉はどうであろうか。「あひるを見る」という言い方がけっして「あひる」のもつ内的連関性(誤解を招きやすい言い方をすれば「意味」)を取り去ったものではないことは明らかであろう。いやしくも知

覚である限り、それはその対象だけに自足し孤立したものではありえず、他の諸対象との間に何らかの内的連関性を有しているはずであり、それはむしろ知覚の理論負荷性理論が正しく指摘した通りである。それゆえ、〈…として見る〉と〈…を見る〉の違いは、けっして内的連関性の有無などではありえない。だが、その内的連関性に対する関わり方はまったく異なっているだろう。すなわち、〈…を見る〉の場合には、その「あひるとしての連関性」はまったく背景に退き、暗黙の了解の内に沈んでおり、〈…として見る〉がそうであったような、私がそれをいかなる内的連関性のもとに置いているのかに関する表明はいささかも為されていないのである。

そこで、ひとつの言い方では、〈…を見る〉はごく普通に知覚における「対象の把握」を表わし、〈…として見る〉はむしろその対象の「把握の仕方の把握」を表わす、と言えよう。だがここで、「把握の仕方の把握」という言い方に伴いがちな誤解を避けておかねばならない。まず第一に、これはウィトゲンシュタインが強調する点であるが、「把握の仕方の把握」は「解釈」ではない。「私は実際そのたびに違うものを見ているのか、それとも私の見ているものを異なった仕方で解釈しているだけなのか。私は前者であると言いたい」(*PU*. II, p 212)。というのも、アスペクト把握とはけっして、「見ること」と独立に「見ること」に付加されたプラスアルファなどではないからである。それゆえ、アスペクトとはむしろ「見方」と言うにふさわしいものと言えよう。例えば照明の仕方であれば、見えている対象とは独立に捉えることができるが、見方というのは見えている対象において示されているものであり、それと独立に捉えうるようなものではない。それゆえわれわれはアスペクトと同じ意味で、「見方」という用語を用いるだろう。だがそのとき、「見方」があたかも私的なものであるかのような誤解は避けておかねばならない。なるほど、ひとつのものは十人十色に見られる。だが、ここで問題にしているのはその言語表現なのであり、ある対象をいかなる意味

のもとに見るかということに他ならない。すなわち、ここで「把握の仕方の把握」ということで言わんとしているのは、例えばひとつの木片を「飛車」として見るか「角」として見るかという違いに等しいことなのである。そしてもちろん飛車と角との差異は、私的な連想や思い入れのごときものではない。あるいはまた、それは「視点」の差異、すなわちパースペクティブの差異でもない。繰り返しになるがアスペクトの変化ということでわれわれが問題にしたいのは、見られているものの「意味の変化」とでも称すべきものだからである。（この点に関して、本質的な違いをひとつ挙げるならば、視点の異なりは見る者の身体に対する言及を要求するが、アスペクトの異なりは身体への言及をまったく含んでいない、ということが指摘できる）。以上のような誤解を避けた上で、われわれは〈…として見る〉は「把握の仕方の把握」の表明であると、あるいはたんに、いかなる見方で見ているかの表明である、と言うことにする。このように捉えるならば、まず、〈…として見る〉という概念は〈…を見る〉という概念がなければ成り立ちえない概念であることが知られるだろう。というのも、何かを見ることなくしては、そのものを見る見方もありえようはずがないからである。だが、逆は言えないように思われる。われわれは日常、別に「見方」など意識せずにものごとを見ている。そこでは、〈…を見る〉は〈…として見る〉がなくとも成立しているように思われるのである。まさにこの点に、「アスペクト盲」の想定が入り込んでくることになる。

> いまや問題がもち上がっている。何かを何かとして見る能力の欠如している人間は存在しうるだろうか。……——われわれはこの欠陥を「アスペクト盲」（Aspektblind）と呼ぼう——そしてそれがどういうことでありうるかを、いま考えてみたい。
>
> （*PU*. II, p 213）

だが、ここで注意されるべきは、アスペクト盲とは、何かを何かとして見ることができない人間であるが、何かを見ることはできる、という点である。それゆえ、われわれの解釈を進めるならば、アスペクト盲の知覚世界では、〈…として見る〉が成立しえないがゆえに、諸対象間の内的連関性はいかなる意味でも主題化されることがないのだが、他方、すべてが〈…を見る〉であるがゆえに、いわば、彼は自明で揺らぎのない内的連関性のもとに安住していることになる。——簡単に言えば、彼は「見方」の意識もその言挙げもなしにものごとを見ている人間なのである。だが、いったいそれはそれほど特殊な人間であろうか。日常の大部分において、われわれは実際そのようにものを見ていないだろうか。私は机を見、机の上に煙草を見て、煙草を取る。そのとき私はけっしてそれを机として、あるいは煙草として見たりはしない。「私が、自分のまわりのさまざまな現象に見入っているときは、それらを見る見方（Auffassung）というようなものがあることはまったく意識されない」（*RPP*. I, §29）。そしてもしそうであるならば、確かにアスペクト盲はたいしたものを失うわけではない、と言えるように思われるのである。

2

『探究』第Ⅱ部においてウィトゲンシュタインは、アスペクト知覚についての議論が一段落ついたところでこう述べている。

> この概念〔アスペクト盲〕の重要性は、「アスペクトを見る」という概念と「語の意味を体験する」という概念の関係の内にある。というのも、われわれは「語の意味を体験しない者には何が欠けていることになるのか」と問

いたいからである。

(*PU*. II, p 214)（〔　〕は引用者挿入。以下同様）

ウィトゲンシュタインが「アスペクト」という概念で言語使用の場面を狙っていることは、この個所からも明らかである。前節においてわれわれは、アスペクト知覚を「見方の把握」として、すなわち「そのものの属する内的連関性をなんらかのかたちで主題化するような体験」として捉えたのであるが、この解釈の内に、言語使用の場面への適用の可能性を見てとることは難しくないだろう。ウィトゲンシュタインがここで「意味の体験」(Bedeutungserlebnis)と呼ぶものは、まさに「その語の属する内的連関性をなんらかのかたちで主題化するような体験」のことであると考えられるからである。そして彼はまた、「アスペクト盲」に対応する概念として「語の意味を体験しない者」という概念を立てる。われわれはこのような人間を『心理学の哲学』における用語を用いて、「意味盲」(Bedeutungsblind)と呼ぶことができるだろう[6]。では、「意味の体験」とは。そしてまた「意味盲」とは、具体的にどのようなものなのであろうか。

例えばウィトゲンシュタインは、「語の表情 (Gesicht)」を問題にする。

> ある語のよくなじんだ表情、それがその語の意味を取り込んでおり、その意味の似像になっているという感覚、これらすべてが無縁であるような人間が存在しえよう（彼らには自分の言葉への執着がないだろう）。[7]
>
> (*PU*. II, p 218)

ここで注意されるべきは、ウィトゲンシュタインは不用意に「感覚」と言い、あるいは「体験」と言ってはいても、

それは例えば頭痛を感じるような、ある一定の時間的持続をもった心的状態の体験とは異なるということである。

「だが、〔語が一定の意味を自らの内に担っているようにみえるという〕この奇妙な体験はどのようなものなのか」――もちろんそれは他の体験同様いささかも奇妙なものではない。ただそれは、例えば感覚印象といったわれわれがもっとも基本的とみなすような体験とは種類を異にするというにすぎない。（*PU*. II, p 215）

ここでは、感覚印象に範例をもつような体験とそうでない体験とが区別されている。この区別に関して、われわれはそれをアスペクト知覚に戻って再確認することができるだろう。アスペクト知覚は次のように特徴づけられていた。

私がアスペクトの閃きにおいて知覚するのは、〔色や形といった〕対象のひとつの属性なのではなく、その対象と他の諸対象との内的関係なのである。（*PU*. II, p 212）

いま言語使用の場面で問題にされているのは、言うまでもなく、記号の属性（例えば文字の大きさや色）ではなく、その記号の意味、すなわち、その記号が属している内的連関性に他ならない。それゆえ、「語の表情」ということでウィトゲンシュタインがその語の意味をそこに認知するような体験を問題にしているかぎり、それはあくまでもアスペクト的な体験なのである。

だが、どうしてウィトゲンシュタインはこのような（ある意味ではつまらないとさえ思われる）現象にこだわったのであろうか。おそらく、ここにおけるウィトゲンシュタインの問題は次の節にきわめてよく表現されていると思われる。

記号がわれわれに与える印象が、言語使用においてなんの役割も果たしていないような言語、そのような印象

という意味では理解ということも存在しないような言語、そういう言語もありうるだろう。それらの記号は例えば書かれて伝えられ、そうしてそれらはわれわれの目にとまる。（すなわち、ここで問題になる唯一の印象は記号のパターンである）。その記号が命令であれば、われわれは規則や表を用いてその記号を行動に移す。像の印象に類したものはそこには入りこまず、ひとはこの言語で物語を書くこともない。

この場合、「記号はシステムの中でのみ生きている」と言えるだろう。

(Z. §§ 145, 146)

問題は、われわれが必ずしもウィトゲンシュタインのこの主張に賛成しない、という点にある。われわれは、このような言語をむしろ「たんなる機械的な記号操作のみから成り立っている言語」と言いたくなるだろう。そして、さらに、たんに機械的に記号を操作しているのであれば、まだそこにおいて記号は「死んでいる」と感じるのである。このわれわれの実感の内実は何か。「たんに機械的に」ということで何をわれわれは言いたいのだろうか。まさにウィトゲンシュタインが意味盲の想定によって執拗に論じていたことは、この問いのもとでアスペクト的体験の位置付けをおそらくは否定的な形で、すなわち不要なものとして求めることだったと思われる。

ではいよいよわれわれは問うていこう、「意味盲は何を失うのか」。確かに語はそれなりの表情をもっているように思われる。「月」という語を例にとろう。[8]「月が出る」および「月日が過ぎる」、この両者において「月」という語はなるほどかすかに異なった表情をもっているようにも思われる。（あるいはむしろ耳で聞いた感じの方が捉えやすいかもしれない。例えば、「あそこにまつのきがある」および「いつものところでまつ」という音を聞くとき、ふたつの「まつ」は同音ではあってもどこか違うように思われよう）。これは反転図形に対応している。なるほど、ひとつ

の図形に対して、それをあひるとして見るときと、うさぎとして見るときとではかなり印象が異なっているように思われるのであるが、それと同じことが、かすかではあるかもしれないが、言葉に対しても生じているのではないだろうか。「月」を空の月として読むときと、月日の月として読むときとでは、「月」という記号の、まさにアスペクト知覚が異なっているように思われるのである。だが、ここでわれわれは問い返さなければならない、いったいそれは、なめらかな言語使用のさなかでも、生じているのだろうか。これはアスペクト的体験の本質に関わる問いである。というのも、なめらかな言語使用のさなかにおいては、アスペクト知覚の言葉を借用すれば、われわれは〈…を見る〉のレベルに立っているはずだからである。まさにそこでは、「本性上」アスペクト的体験は生じていないのではないだろうか。

先に語の表情を見て取ろうとしたときに、われわれは、その言葉を通常のコミュニケーションから切り離して、立ち止まり、吟味した。これはあたかも、散歩の途中で何かが目についたので、もっとよく見ようと近づいたことに等しいようにも思われる。だが、ここでわれわれは、立ち止まったときにのみ見えてくるものを見ているのではないか。少なくとも、アスペクト知覚の場合にはそうであった。ごくふつうに机を見、外の木々を見ているとき、私はけっしてそれらを見る見方などは意識していない。〈机として見る〉という体験があるとすれば、私は端的な知覚状況から身を離し、別様の見方の可能性に思いを馳せ、自分がそれを見ていることを吟味し説明しようとするときでしかない。言語使用の場合にも同じことが言えよう。語の表情のような現象は、同音異義語を吟味するような場合にもっとも見て取りやすい。だがそれは、たんに通常時のかすかな感覚がそこにおいていっそう際立つということではありはしない。同音異義語を吟味するような場面では、アスペクト知覚の議論のさいにすでに確認された「変化の可能性、他の選択肢の存在」という点において、なめらかなコミュニケーションの場面とは本質的な違いが存するのであ

る。通常の言語ゲーム、なめらかなコミュニケーションのさなかにあって、ひとつの記号がさまざまな内的連関性の中に置かれうるなどということはけっして意識されていない。ならば、そのときわれわれは、いかなるアスペクト的体験も有してはいないのである。

そのような〔語の表情を吟味するといった〕ゲームの中で、あるときはかくかくに、そしてまたあるときはかくかくに体験しているということを、鋭敏な聞き方が私に示してくれるのであれば、そのことはまた、会話の流れの中ではそうしたことをしばしばまったく体験しないということをも示しているのではないか。――というのは、私があるときにはかくかくのことをまたあるときにはかくかくのことを意味し、志向し、後にはおそらくまたそう説明するということが、〔会話の流れの中では〕まさに問題になっていないからである。

(*PU*. II, pp 215-216)

かくして、次のように言われる。

私が「意味盲」の場合を想定したのは、言語の使用において意味の体験はなんら重要性をもたないように見えたからであり、それゆえまた、意味盲はたいしたものを失わないように見えたからである。

(*RPP*, I, § 202)

だが、問題はこれで終わりではない。むしろ意味盲の問題はここから始まる。というのも、以上の考察から明らかになったことは、一見逆に思われるかも知れないが、意味盲とはけっして、通常の言語使用のさいに語の表情といっ

た感覚をもたない者のことではない、ということだからである。通常の言語使用においてアスペクト的体験をもたないということは、アスペクト的体験の本性からいってそうなのであり、別に意味盲に限ったことではない。われわれと意味盲とは、その点ではまったく違いがないと言える。だが、われわれは意味盲ではない。では、意味盲はわれわれとどこが違うと想定されているのだろうか。

ポイントは、先の引用において明らかであるように、ウィトゲンシュタインはここで二つの言語ゲームのタイプを区別しているという点にある。すなわち、ひとつは通常の言語使用、よどみのないコミュニケーション等の場面で為されるさまざまな言語ゲームであり、もうひとつは、先の引用の言い方を用いるならば、「私があるときにはかくかくのことを、またあるときにはかくかくのことを意味し、志向し、後にはおそらくまたそう説明するということが、まさに問題に」されるような場面、すなわち、端的な言語使用のレベルから身を離し、いくつかの選択肢を前にして吟味し、説明するといった場面で為される諸ゲームである。ウィトゲンシュタインはこの後者のタイプのゲームを「語体験ゲーム」と呼ぶことがあるが、われわれとしてはむしろ、それを「アスペクトゲーム」と呼ぶことにしたい。（理由は、もはや「体験」という側面にウエイトを置きたくないからである）。そしてそれに対して、前者を「通常ゲーム」と呼んでおくことにする。そこで、この用語を用いて、目下のポイントを繰り返しておくならば、このように言えよう、――語の表情といったアスペクト的体験が生じるのは、その本性上、アスペクトゲームにおいてであり、通常ゲームにおいてではない。それゆえ、意味盲とは、通常ゲームにおいてアスペクト的体験が生じない者の謂ではなく、通常ゲームには参加しうるのだが、アスペクトゲームには参加しえない者のことなのである。ウィトゲンシュタインが意味盲に対して、それは色盲のようなある種の感覚の欠如した者ではなく、むしろ精神薄弱に類することなの

だと言うのも、それゆえであるだろう。[9]

かくして、「意味盲は何を失うのか」という問いでわれわれは、通常ゲームとアスペクトゲームという二つのゲームの関係を問うことになる。まさに『探究』第Ⅱ部の議論はそのように進んでおり、先に引用した、「会話の流れの中ではわれわれはアスペクト的体験をもたない」と述べた段落は、さらにこう続けられている。

だが、そのとき次の問いが残る。なぜわれわれはこの語体験のゲーム〔アスペクトゲーム〕においても「意味」とか「意味する」といったことについて語るのか。——これはまた別の種類の問題である。(*PU*. II, p 216)

そして、次のような、一見すると語の表情といったことがらとは結びつきにくい（しかしより本質的な）規定は、まさにこの脈絡において与えられていると考えられねばならない。

「私がその言葉を聞いたとき、それは私にとって……を意味していた」と言う人は、ひとつの時点とその言葉のひとつの使い方に関わっている。——ここで注目すべきは、もちろん、その時点との関わりである。

〈意味盲〉の人に欠けているのは、その関係に他ならない。 (*RPP*. I, § 175)

このような、「私がその言葉を聞いたとき、それは私にとって……を意味していた」（あるいは「私はその言葉で……を意味していた」）といった言い方は、変化の可能性、選択肢の存在を受け入れ、その上でその内のひとつの方向を取り出したことの表明であり、「そのとき私にとって、その言葉は……として聞こえた」（「私はその言葉を……として発話した」）に等しい言い方であろう。ウィトゲンシュタインがここで問題にしているのは、もはや感覚の有無と

いったことではなく、意味に深く関わっているように見えながら通常の言語使用とは区別されるべきもうひとつの言語ゲーム、すなわち、アスペクトゲームなのである。そしてウィトゲンシュタインは、ここで語られる「意味」が、「意味」の意味にとって本質的であるかどうかを問う。「意味とは使用である」とは、言うまでもなく、通常ゲームにおける言語使用のことであるから、もし、アスペクトゲームにおける「意味語り」が「意味」の意味にとって本質的であるならば、当然このテーゼは修正されねばならないだろう。

このように浮かび上がってきた問題に対して、ウィトゲンシュタインが説得的な議論を提出しているようには思われない。それでも、彼の議論を再構成するならば、それは次のように進んで行くと思われる。

まずウィトゲンシュタインは、この言い方が基本的に過去形をとる〔という点を取りあげる。

> 意味するという特殊な体験は、〔発言の意味を〕説明し、〔そのさい〕過去形を用いるという仕方で反応することによって特徴づけられる。
>
> (*RPP*. I, § 688)

ここには少し強引なところがあるかもしれない。われわれは、「私はいまこの言葉で……を意味している」と言いもしようし、あるいは「私はこれからこの言葉で……を意味する」と言いもするだろう。だが、通常ゲームとアスペクトゲームとは同時には行ないえない。アスペクトゲームは使用の現場を離れねば為されえず、アスペクトゲームの為す意味語りは、当然のごとく（形式上はどうあれ、実質的には）現在形ではありえないのである。ある意味ではこれは自明のこととも言える。だが、ウィトゲンシュタインは、こうした論点によってアスペクトゲームを「夢を語る」ことに通底させたかったのだと思われる。ウィトゲンシュタインはこう述べている。

意味が心に浮かぶことを夢に比すならば、われわれは通常夢を見ることなしに語る。
意味盲とはそのとき、いかなるときも夢を見ることなく、語る者であると言えよう。 (*RPP*. I, § 232)

夢もまた、現在形では語れないものなのである。[10]

おそらく、この夢の比喩が意味盲を巡るウィトゲンシュタインの議論の最後の局面であった。この比喩の内に彼は、アスペクトゲームがあくまでも通常ゲームに対して寄生的なものでしかないという論点をこめている。ウィトゲンシュタインが、「第一義的」(primär) な意味および「第二義的」(sekundär) な意味という論点を提出するのも、この脈絡においてであると考えられる (cf. *PU*. II, p 216)。すなわち、アスペクトゲームで「意味」について語るのは「意味」という語の第二義的意味においてであり、第一義的な意味で (すなわち通常ゲームにおける使用という意味で)「意味」の意味を了解している者のみが、第二義的な意味での「意味」の意味を了解できる、とされるのである。

アスペクト知覚に戻って述べるならば、われわれは、「あひるを見る」ことの了解こそが「あひるとして見る」ことの了解に先立つであろうことを指摘できる。あるいは、「飛車として使う」という言い方を理解できるのは、ただ飛車を使える者のみであることを指摘してもよい。アスペクトゲームの為すことは、いくつかの選択肢の中からひとつを浮かび上がらせることであり、その選択肢の各々は通常ゲームから取られてきたものなのである。そのように考えるならば、言語習得もまた、アスペクトゲームで行なわれることではないと思われる。われわれは〈…として〉のレベルで言語を学ぶのではなく、〈…を〉のレベルで言語を学ぶのではないか。すなわち、おそらく言語習得の過程で中心的なことは、実際にやってみせ、そしてそれをまねさせることなのであり、いわば、適切にしくまれた通常ゲ

ームの中で、直接に通常ゲームを学んでいくのではないだろうか。もしそうであるならば、われわれは通常ゲームの中で育ち、通常ゲームの中で生きていると言えよう。かくして、ウィトゲンシュタインはこう宣言するのである。

これをひとつの夢と呼べ、それは何も変えはしない。　(*PU*. II, p 216)

以上のように見てくるならば、もはやわれわれは、これが『探究』第Ⅰ部と切り離されているような印象はもたないだろう。例えば、『探究』第Ⅰ部を論じたさいのクリプキの例であるが、プラスとクワス[11]の例をここにあてはめて考えてみることもできる。確かに、われわれの行なってきた計算は、論理的にはなお無限のアスペクトのもとに置かれうる。それがクワスのような規則である可能性は排除できないだろう。だが、われわれは足し算をしているとき、クワスのような可能性など意識してはいない。明らかに、他のいっさいの可能性には目を閉ざし、たんにプラスを行なっているのであり、けっしてそれをプラスとして行なっているのではない。かくして、われわれによって「他の選択肢が意識されることのない端的な使用のレベルを離れることがない」として規定された意味盲という概念が、『探究』第Ⅰ部の中心的主張のひとつと考えられる次の言葉とまさにぴったり重なるのである。

規則に従っているとき、私は選択をしない。
私は規則に盲目的に(*blind*)従っている。　(*PU*. I, § 219)

意味盲とは、つねに盲目的な言語実践者なのであり、しかし通常ゲームがそもそも盲目的に為されている以上、意味盲はたいしたものを失わないと考えられるのである。

3

だが、意味盲は本当に何もたいしたものを失いはしないのだろうか。アスペクト的体験は本当に言語実践にとってなんの重要性ももたないのだろうか。実際、ウィトゲンシュタイン自身、ときにみせもする決然とした調子にも関わらず、なおその結論を出しあぐねているように思われる。彼は立ち止まり、ためらい、引き返し、また行こうとして、やはり歩を止める。ウィトゲンシュタインのみせたこの揺らぎの真意はなお定かではない。しかしわれわれは、ここでウィトゲンシュタイン解釈を離れることにしよう。そしてわれわれなりにウィトゲンシュタインの揺らぎを受けとめ、その揺らぎに決着をつけようと思う。だがそれは、意を決して目前のゴールに飛び込むことによってではなく、この「結論」を否定することによって、すなわちアスペクト的体験こそが言語実践の生命線であることを示すことによって、である。

そこでまず、議論に入る前に、ひとつの基本的な確認を為しておきたい。われわれは、意味盲を「アスペクトゲームに参加しえない者」のように規定した。しかし、この「しえない」というのは、言うまでもなく、能力の欠如のごときものではない。それは論理的なことであり、意味盲にはそもそもアスペクト概念を適用してはならない、ということなのである。それゆえ、以下のわれわれの議論は、アスペクト盲および意味盲の想定のもつ論理的帰結を求めることによって、アスペクト概念の分析を行なうことに他ならない。

さて、われわれが意味盲に対して投げかけたい疑いはこうである、――「意味盲は規範性を失っているのではないか」。このことにひとつの照明を当てるために、「行動」と「実践」の区別を導入しよう。[12] 例えば、碁盤上にひとつ黒

石を置いたとして、私はこれを「碁を打つ」として、すなわち碁の規則に従っているものとして同定する。だがそれは、何の規則とも無縁に、たんにそうしただけのものとして同定されることもありうる。あるいはまた、目下のわれわれの関心に即して言うならば、「言葉を話す」と「かくかくの音を発音する」との間の区別を例にとることもできよう。そこでわれわれは、前者を「実践」として同定されたと言い、後者を「行動」として同定されたのだと言うことにする。すなわち、「実践」は規則ぬきでは同定されえぬものであり、「行動」は規則ぬきで同定されるものである。そして、実践として同定するときの言明を「実践描写」、行動として同定するときの言明を「行動描写」と呼ぼう。そのとき問題は、雑に述べるならば、実践描写を為している任意のものに対して、われわれはそれに応ずるような行動描写を与えることができる、という点にある。ここで注意されるべきは、いずれの描写にも中立なひとつのものがあり、それをああも言ったりこうも言ったりできるというのではない、ということである。例えば、いま、現実に「碁を打っている」という描写が為されているとしよう。そのときわれわれは、すでにひとつの実践として同定されているものに対して、新たに行動として同定されたものを無媒介に（つまり、中立的な何ものかなどなしに）、いわば、「重ねる」のである。[13] このような実践描写と行動描写の重ね描きは、そこからさらに進んで、ただ行動描写のみが為される世界を現出（幻出?）させる。実際には、われわれはときに応じて二つの描写を使い分けている。だが、そこから、実際に行動描写をしているところはそのままに、そして実践描写をしているところはそれに重ねられる行動描写を取り出すことによって、虚実織り成された行動描写の綴れ織りを織り出すのである。かくして、もともとはひとつの世界に対してケース・バイ・ケースに使い分けられていた二つの描写法が（それゆえ、本来はけっして二元論的ではなかったものが）、むしろ二つの異なる世界として二元論的に読み換えられ、「行動世界」とでも言

うべき世界を造り出すことになる。ここにおけるポイントは、そのような「行動世界」には規則がない、という点にある。「規則的な行動」はあるが、「規則に従う」ということがない。それは規範性のない世界なのである。そして、ひとたびこの世界に入り込んだならば、もはや原理的に規則や規範は現われえない。いかに行動描写を精緻化しようとも、あることを「規則に従っている」ものと同定することは、行動レベルでの何か未知の事実（あるいはディスポジション）を見出すこととは無縁なのである。問題は当のそのこと、その「事実」そのものの成り立ちに関わっている。

われわれは先に、意味盲を「盲目的実践者」として規定した。だが、実は意味盲とは行動世界の住人なのではないか。これがわれわれの疑念に他ならない。例えば17＋28を提示され、しゃっくりのように45という音が口を突いて出てきたとしよう。もちろん、「しゃっくりのように」というのはたんなる言い回しであり、見かけはわれわれとなんの違いもない。それゆえ、「その人は足し算をしたのか」、という問いには実質がない。だが、それでも、われわれはこの件に関して例えば「そのような人には足し算の理解が欠けている」等のことを言いたくなるだろう。ここで、一般にそうされがちなように（そしてリーズとクリプキがそうしたように）、「何かの感じ」を持ち出してきてもむだである。しゃっくりのように45という音が口を突くのと同時に、彼にはやはりしゃっくりのようにその「何かの感じ」が湧き起こるだろう。問題は他の事実を引き合いに出すことではどうにもならないのである。われわれは、「実践」と「行動」の違いをどうにかして言い立てたいと思っている。そうすべきだからそうしたのと、たんにそうしたこととは、確かに違う、そう言いたいのである。

意味盲はアスペクトゲームこそ為しえないが、通常ゲームはわれわれと共有していると考えられていた。実際、議論上、われわれが通常ゲームで為すことは意味盲にもすべて為しうると想定すべきである。だが、それでもなおわれ

われは、意味盲とわれわれとが通常ゲームを「共有」しているということに異議を唱えたい。すなわち、意味盲とは「行動世界」の者に他ならず、「行動世界」の者はわれわれと実践を共有しえない、と主張したいのである。われわれはさらに、「意味盲」の想定が「実践」という事の成り立ちを破壊してしまうことの議論へと進んでいかねばならない。

4

まずわれわれはアスペクト盲について考察しよう。――アスペクト盲はいったい何を失うのか。例えばアスペクト盲の者があひる-うさぎの反転図形を前にしたとき、いったいどのようなことになるのか。これに対してあるいは、こう答える人もいるかもしれない。「彼はあひるならあひるを見るのみであり、両者の交代を経験しないだろう」、と。だが、必ずしもそうではない。そしてまた、そのようなところに問題のポイントがあるわけでもない (cf. *RPP.* II, §480)。彼は「あひるを見る」ことも「うさぎを見る」こともできる。それゆえ彼は、そこにときにはあひるを見、ときにはうさぎを見ることもありうるだろう。しかし、そのときの彼の発言はおそらくこのようなものとなるに違いない、「私はうさぎを見ていた、だがいまはそこにあひるを見ている」。このアスペクト盲の言い方と、われわれの、「私はうさぎとして見ていた、だがいまはそれをあひるとして見ている」という言い方を比べてみよう。われわれは、この自分たちの言い方で、「ひとつの物が別様に見えるようになった」ということを意味している。だが、アスペクト盲の言い方の中には、われわれがアスペクト変化において漠然としながら掴んでいるこのひとつの個体が登場する余地がないのである。[14] われわれの言い方では「それ」として指示されている物が、アスペクト盲の言い方におい

てはせいぜい「そこ」としか言われえない。逆に彼らの言い方では、「うさぎを見る」で個体としての物-うさぎが指示され、「あひるを見る」ではまた別の個体としての物-あひるが指示されている。ここにおいて、それがもはや「別物」となっていることが理解されよう。アスペクト盲が経験しているのは、われわれのようなアスペクト変化ではなく、端的に別物への「変身」なのである。

われわれはと言えば、アスペクト変化に際してそれを物の変化であるとは考えない。ここにおける際立った特徴は、アスペクト変化がいっさいの物理的変化（対象の物としての変化、照明等の周囲の状況の変化、そして自分自身の身体的状態の変化）を伴うことなく可能である点にある。そしてわれわれはそれを普通、「見方の変化」と称する。他方、アスペクト盲にはまさにこの概念が欠如している。すなわち、われわれは「アスペクト盲」という概念を、「見方」といった概念とは抵触するもののとして定めたのであり、それゆえわれわれがある人をアスペクト盲であると規定したならば、われわれはもはや彼に「見方」ないし「見方の変化」に属する概念を適用できないのである。そしてこれを認めるならば、アスペクト盲にとってはもはや「別物への変身」という概念しか残されていないことは、その直接の帰結であろう。だが、ウィトゲンシュタインはこの一歩を踏み出していない。これは彼にとって決定的なことであったと私には思われる。というのも、まさにこの論点から、「アスペクト盲には見誤りがない」という重大な帰結が引き出されるからである。

例えば、われわれが遠目に蛇を見て、近寄ってよく見たらただの縄であったとしよう。そのときわれわれは、「なんだ、縄を蛇として見てしまったのか」と言う。では、アスペクト盲はどうか？　まったく先の議論と同じである。彼はまず蛇を見、ついでそこに縄を見る。蛇は端的に縄に変身したのであり、それはもはや「見誤り」ではない。な

るほど、われわれならば、それは「蛇として見誤った」のであるが、アスペクト盲は「正しく蛇を見た」のであり、「正しく縄を見た」のである。そのことは「アスペクト盲」という概念の帰結に他ならず、それゆえ「アスペクト盲の者が見誤りをした」という文は矛盾ないしはカテゴリーミステイクを犯しているのである。

だが、「見誤り」という概念のないところにどうして「正しく見る」などという概念を位置づけることができるだろうか。いや、そもそも、ここでわれわれは「知覚」を語ることができるのだろうか？ 彼の「知覚」は原理的に「正しい」。見られた物は必然的にそこに在るのであり、ここには、物と知覚との完全な癒着が生じている。物と知覚の（概念としての）乖離が生ずるポイントは、物としての同一性を保ちつつ、同時にそれに対する「見方」がずれを示し、修正を迫られるような場面であろう。物について語るだけでは済まなくなって初めて、われわれは知覚の言葉を用いるのである。それゆえ、アスペクト盲には「知覚」という概念は不必要であり、不適切でしかない。彼は端的に転変する物の世界に住んでいる。彼にとって〈…を見る〉は、もはや、「目を向けた方向に…がある」といった程度のことしか意味していないだろう。そこで、知覚概念を含む描写を「知覚描写」、知覚概念をいっさい含まぬ描写を「物描写」と呼ぶならば、アスペクト盲に対する描写はまさに物描写なのである。それゆえ、「アスペクト盲の者が…を見ている」という文もまた、矛盾ないしはカテゴリーミステイクとされねばならない。そこでわれわれは、〈…として見る〉がない者には〈…を見る〉もない、と結論する。〈…として見る〉と〈…を見る〉は概念的に相互に依存しあっているのであり、そのどちらか一方、ここでは〈…を見る〉のみしか許されないというアスペクト盲の想定は、そもそも矛盾しているのである。

5

次にわれわれは「意味盲」を考察しよう。そこでまず、言語使用の場面において反転図形に対応するものは何かを考えてみたい。プラスークワスは確かにそれに近いものを与えてくれる。だが、正確な意味で反転図形に対応するものとは言えないだろう。あひるーうさぎの図形の場合、われわれはこの反転図形の前にすでに「あひるを見る」という体験も「うさぎを見る」という体験ももっている。だが、プラスークワスはそうではない。クワスはあくまでもプラスに対して寄生的な位置しかもちえず、われわれは「クワスをする」という端的なレベルには立ちえないのである。それはまさにグッドマンによって論じられた「ブルーグルー」[15]と同じ関係にある。ブルーとグルーの場合、われわれはけっして「グルーを見る」ことがない。両者は対等の位置をもたず、それゆえわれわれは青い色の紙を見てそれをブルーグルーの反転図形であると言ったりはしない。同様に、プラスークワスもまた、反転関係に立つとは言われえないのである。むしろ反転図形に対応するものは、先にも論じたように、同音異義語であろう。だが、アスペクト変化が反転図形という人工的なものに頼らずとも、見誤りという平凡な事例において捉ええたように、意味の反転現象とでも呼ぶべき出来事もまた、日常の場面において容易に見出すことができる。例えば、「すばらしい絵だ」と誉められて気をよくしたところが実は嫌味であった、というような場合、それはまさに正反対の意味への反転となる。あるいは、もっと普通の事例は、相手の言ったことの意味を取り違え、後で訂正されるときが、やはりそうであろう。さらに頻繁に起こることは、相手の言った意味が分からないときである。私は相手に意味の説明を求め、相手はそれに答えるために、何か別のことを言ったり何かを指差したりする、そして私はさっきの発言の意味を了解す

る。ここで起こっていることは、反転図形よりも、むしろ判じ絵における体験の方に対応していると言えよう。では、こうした体験が欠けているということは、いかなる帰結をもつのであろうか。

まずわれわれは、いま述べたような「意味の説明」が反転図形における説明と基本的に同型である点に注目したい。反転図形を前にして、「それを何として見ているのか」と尋ねられ、「あひるとして見ている」と答えたとしよう。この言葉で相手もまたそこにあひるのアスペクトを認めるようになったならば、これで説明は終わるが、もしそれでもなお相手がそこにあひるのアスペクトを見て取ることができなかったならば、そのときわれわれは、その図形に何か他の図形、模型、あるいは実物、あるいはそのものに関連するもろもろのものを並置して、相手のアスペクトを変えようとする。ともあれ、相手のアスペクト変化を引き起こしたときに、その説明は成功とされよう。同様に、先のような意味の説明においても、問われている記号に対して、他の記号を並置し、(すなわち他の発言を為し)、あるいは何ものかに注意を促し、当の記号に対する相手のアスペクトを変えようとするのである。ここで並置されるものは、アスペクトの変化を引き起こしうるならば何でもあってもよい。逆に、何をもってきても成功しないという可能性もあるだろう。このような「説明」は、ごく日常的にみうけられるものであるが、一般に「説明」と呼ばれるものとは、きわめて異なっている。というのも、説明の一般的モデルは、おおまかに言って、説明項がなんらかの補助仮説を伴って被説明項を(理想的には演繹的に)導出する形のものであるのに対し、われわれがいまアスペクトの場面で見ようとしている説明は、被説明項に対して説明項が並置され、それによって被説明項に対する把握の仕方を変えるような説明であったからである。われわれは、前者のタイプの説明を「導出型説明」と呼び、後者のタイプの説明を「アスペクト的説明」と呼ぶことにする。

さて、意味盲にはこのアスペクト的説明という概念が欠けている。このことのひとつの帰結を「理由」と「原因」の区別という場面で考えてみたい。[16] 原因を与えるということは、それに適当な条件を加えて結果となるできごとを導くことであり、導出型の説明を与えることに他ならない。だが、理由を与えることはそうではない。例えば、「なぜ彼を殺したのか」という問いに対して、「彼は私の父を殺した」[17]とか「さもなければ私が殺されただろう」と答えるならば、それは他のことをひきあいにだすことによって、説明を求められている行為を「復讐」とか「正当防衛」といったアスペクトのもとに置こうとしたのであり、それゆえそれはアスペクト的説明となっている。あるいは美学における説明に関して、ウィトゲンシュタインはこう指摘する。「ある芸術作品がある特徴をもつべきことに対する正当化は何であろうか。……われわれは、その理由としてさらなる記述を与える。美学のしていることは、しかるべき特徴に注意を引くこと、これらの特徴を示すためにいくつかのものを並べて置くことに他ならない。ある人に『ここがクライマックスだ』と語ることは、『これがその判じ絵に隠されている男だ』と言うことに似ている。すなわち、まずわれわれの注意がなにがしかの特徴に向けられ、さらにその地点に立って当の特徴を見るのである」[18]。ここで述べられていることはまさにアスペクト的説明に他ならないだろう。そこで、意味盲の想定に戻るならば、彼にはアスペクト的説明が理解しえず、それゆえ、理由を与えることも、また与えられた理由を理解することもできないのである。

このことはさらに多くの帰結をもっていようが[19]、われわれにとって重要なひとつの帰結は、それゆえ意味盲には「条件付け」といった因果的概念は適用できるが、「賞罰」という概念は適用できない、ということである。というのも、賞罰という概念は賞罰を与えることの理由と切り離せないものだからである。理由もなく人に快苦を与えること

はありえようが、理由もなく人を称賛したり、罰したりすることはありえない。たとえ暴君が罪も無い人を引ったて彼を罰したとしても、それは「理由もなく人を鞭打っている」かあるいは「不当な理由で人を罰している」かいずれかとされる。罰はそれがいかに不当であろうとも、理由がないときには「罰」として同定されえないのである。あるいは称賛も同様であり、たんに芸をした犬に食べ物を与えることとの違いは、称賛する側とされる側との間にその称賛の理由についての了解が存するという点にある。すなわち、称賛されるべき行為がいかなる概念のもとに個体化を受け、それゆえそれがいかなる文法のもとに置かれているのかについての了解、つまりアスペクト的な了解が、そこでは要求されているのである。以上のことが正しいのであれば、われわれは意味盲という想定が作り出す概念のネットワークから、「賞罰」という概念も排除しなければならないことになる。だが、「賞罰」という概念がありえず、「条件付け」といった因果的概念しかないところにどうして「規則に従う」という概念が成立するだろうか。不可能であると思われる。

6

われわれは、さらに進んで、「賞罰」以前に意味盲にはそもそも「誤り」ということがないのではないかという点を論じることにしたい。すなわち、「アスペクト盲には見誤りということがありえず、それゆえもはや『知覚』という概念が適用できない」という先に為した議論が、意味盲の場面においてどうなるのかを調べてみることにしたい。そこでわれわれは次に、「ある記号の意味を誤解する」ということの分析にとりかかろう。

一般に「誤解」を正すとは、発話されるか書かれるかして提示された記号（例えば「すばらしい絵だ」）に対して示

された意味理解1（それを称賛として受け取る）が意味理解2（それを悪口として受け取る）に訂正されることである。それゆえ、これはアスペクトの反転とパラレルであると言える。そしてアスペクト盲においては、アスペクト1からアスペクト2への変化がまさに物1から物2への変身とされたように、意味盲においても、意味理解1から意味理解2への変化は端的に意味1から意味2への変化とされることになる。例えば先の嫌味の例では、「すばらしい絵だ」という文は意味盲の者がそれを称賛と受け取ったならば、それは称賛なのであり、後に悪口と受け取るようになったときには悪口に変化するのである。彼はけっして、「悪口として言われたものを私はさっき称賛として受け取ってしまった、それゆえあんなに喜んだのは愚かだった」とは言わない。さきほど喜んだのはそれはそれで正しい反応だったのであり、そしていまはまた、怒るべきときに怒っているのである。これはあるいは考えにくい想定であるかもしれない。われわれは、ひとつの言明には明確であれ曖昧であれひとつの意味があり動くのはそれに対する聞き手の理解であるというイメージをもっている。ところがここで言われているのはそうではなく、意味そのものが動くというのである。だが他方、もう少しナイーブでない感覚としては、受け取り手の理解を超越した意味なるものなどありようはずもないから、理解に応じてもともとのテクストの意味そのものが変化するということもそれほど考えにくいことではないだろう。しかし、程度問題である。意味盲の想定においては意味理解と意味とが完全な癒着を起こしている。ここではそれゆえ、そもそも誤解という概念がありえず、「正しい意味理解」ということもありえないのである。あるいはまた、別の言い方をするならば、いま述べたことから明らかであるように、誤解を正すことはまさにアスペクト的説明を与えることに他ならず、それゆえ、意味盲には適用されえない概念になっている。だが、けっして正されることのない誤解はもはや誤解とは言えない。かくして、意味盲には誤解ということがない、と結論でき

るのである。

われわれはまた、規則に従い損ねることとして「計算間違い」に代表されるような誤りも考えねばならないだろう。というのも、例えば足し算の計算間違いは、ほどほどの割合ならば、けっして足し算を誤解していることにはならないからである。その規則の意味は十分理解していて、なお、その規則に従い損ねるということが、われわれには少なくない。そこで例えば、213－57＝166と計算し、その後やり直してみて213－57＝156であると納得したとしよう。そのとき、意味盲ならざるわれわれにとっては、「213－57＝166」という記号は引き算としての意味をもったものから「誤った引き算」として受け取られるべき記号へと変化する。ところが、意味盲には「誤った引き算」という概念がありえない。というのも、「誤った引き算」とは、「引き算として」行なわれ、しかも「引き算を」し損ねたことに他ならないからである。「誤った引き算」という概念は、「実行されなかった規則」に対する言及を要求する。だが、それは意味盲には不可能でしかない。彼にとって、規則はそれを実行している現場を離れては端的に意味を失ってしまうだろう。それゆえ意味盲の者はただ、「私は213－57＝166という引き算を行なった。そしていまは213－57＝166という無意味な記号がある」、としか言えないのである。[20] さらに進んで、意味盲がまた同時にアスペクト盲でもあることを受け入れるならば、それはもはや、「213－57＝166」という同一の記号がかつては「引き算」という意味をもち、いまは無意味なものになった、とすら言えないことになる。そこでは、両者は記号としてすら同一性を言い立てることのできないまったくの別物とされよう。うさぎがあひるという別物に変わってしまうように、意味盲（＋アスペクト盲）にとって、それは「1＋1＝2」という有意味な記号が「*p@-jkt」のような無意味な記号に変身するのと同じレベルの出来事が起こったことなのである。（それは、文字通り、ノートの上で記号が変身する状況を考

えていただきたい。もちろん彼は驚くだろうが、よくあることなので、われわれが計算間違いをしたときに驚く程度にしか驚かないだろう)。

そこで、「213－57＝166」と答えた生徒の誤りを教師が正すということは二つの点でアスペクト的説明になっている。まず、教師は213－57＝156という別の記号を生徒に示す。(それは166＋57＝223という記号でもよいし、166の十の位の6に注意を促すことでもよい。場合によっては数式以外のものを示すことも考えられる)。そしてそれによって教師はひとつには「213－57」という記号のアスペクトを変える。すなわち、それは166という自然数に結びつけられるものではなく、156という自然数に結びつけられるべきであることを示唆するのである。そしてそれと同時に彼はまた、生徒の「213－57＝166」という記号に対するアスペクトを変える。すなわち、生徒に「あのときは213－57＝166を引き算としてやっていたが、それはじつは誤った引き算だったのだ」というアスペクト的体験を与えるのである。このアスペクト的説明はまた、教師が生徒を叱ったことの理由を与えることともなっていよう。だが、もし意味盲のように、教師が213－57＝156という別の記号を与えることによって、生徒の213－57＝166という記号を*p@-jk#のごとき無意味な記号に変身させるのだとしたならばどうであろうか。教師はそれとともに子供を叱るかもしれないが、それに対しては何の理由も与えられないだろう。教師はそうすることによって、213－57あるいは213－57＝166という記号が置かれている内的連関性(あるいはその欠如)にはまったく触れえていないからである。

結論は明らかであろう。意味盲には「誤解」もなければ「計算間違い」もない。だが、それに対して正しいとか誤りであるとかが言えないのであれば、意味盲に対しては「規則に従う」ということも意味をもたないのである。

7

われわれは、「対象の把握」という概念に対して、むしろ「把握の仕方の把握」に属する概念、すなわち「アスペクト的体験」という概念に注意を促してきた。一言で言うならば、われわれの議論はこうであった。アスペクト盲にはそのような意識がありえない、すなわち、彼らには、対象と対象の把握との間にずれが生じることがありえない。かくして、そのような者には「対象」という概念があれば十分であり、対象の「把握」という概念、すなわち、「知覚」あるいは「規則に従う」といった概念は彼らにはありえないのである。われわれの以上の論法は、ウィトゲンシュタインの次の一節の言わんとすることに等しい。

> ひとは規則に「私的に」従うことはできない。さもないと、規則に従っていると思うことが、規則に従っていることと、同じになってしまうだろうからである。
>
> (*PU*. I, § 202)

それゆえ、あえて言えば、われわれの到達した結論は「意味盲による盲目的な言語使用は私的言語に他ならない」というものであると言うこともできよう。ところがそのとき、まさにこの「私的」という言葉が反論を引き起こすだろう。いったい意味盲たちはいかなる意味で「私的」だというのか。すなわち、こう反論されるのである。「われわれが扱っていたのはけっして自閉的なひとりの意味盲ではなく、意味盲の集団であった。そして、その集団の誰もが、かく足並みを揃えて発話し応答しているのである。だが、そうであるならば、そのような『言語』はもはや『私的』

とは言えないのではないだろうか。まさにそれは公共的に流通している『言語』ではあるまいか」。われわれは最後にこの反論に答えたい。

なるほど、彼らの振舞いはけっして無秩序なものではない。それはわれわれの通常ゲームにおける行動（すなわち、われわれの実践に対して「重ねられた」行動）と寸分違わぬものであるかもしれない、いや、議論上まさに寸分違わぬと仮定されるものなのである。そこで、われわれが不用意に、「意味盲とわれわれは通常ゲームにおいて『表面上』違わぬものであるかもしれないが、だが、……」と語り始めたならば、先を続ける間もなく、反論されるだろう。「いや、われわれにはその『表面』がすべてであり、それ以上『深い』ところなどありはしない」。そして反論者はあるいはさらにこう続けるかもしれない。「『規則に従う』ということは、けっして、何か実体的な『規則』がありそれに照らして正しいとか誤っているといったことではなく、われわれがまさに『一致して』かく行なうということなのである」、と。もちろんわれわれも、規則に従うことが、何か実体的な「規則」に照らして正しいとか誤っているといったことであるなどと言っているわけではない。ここでわれわれが為すべきことは再び、「一致する」という概念の検討なのである。(21)

そこで、まずわれわれは「一致しない」という概念を取り上げよう。話者AがSと発話し、話者BがTと発話したとする。SとTが「一致しない」と言われるのはいかなるときであろうか。ここでわれわれは「記号の不一致」、「意見の不一致」そして「意味の不一致」の三つを区別しなければならない。

最初に「記号の不一致」を考えよう。Aが「213−57＝166」と発話し、Bが「213−57＝156」と発話するとき、確かにそれはまず記号として異なっている。だが、明らかに、われわれが問題にしたい不一致はこのような記号の不一

致ではない。多くの場合、われわれは異なる記号でありながら、そこに発話としての一致を見るだろう。（われわれは異なる言い回しで同じ趣旨のことを発話する。きわだった例としては、「すばらしい絵だね」という嫌味に対して「まったく箸にも棒にもかからん」と応じるような場合。あるいは代名詞や指標的表現（indexicals）を含む場合もそうである）。あるいはまた逆に同じ記号でありながら、発話としての不一致を見てとることもある。（「すばらしい絵だね」という嫌味に対して、嫌味でなく「ああ、すばらしい絵だ」と応じるような場合。そしてもちろん代名詞や指標的表現を含む場合）。それゆえわれわれが問題にしたい一致不一致は、記号としての一致不一致とは異なっている。

あるいはまた、われわれは二つの発話が一致するか一致しないかだけではなく、第三の選択肢も考えねばならないだろう。すなわち、発話Sと発話Tはまったく別々のことについてのものである、という選択肢である。それゆえ、SとTが「一致しない」と言われるためには、少なくともそれは「同じもの」についての発話であらねばならない。さらに、同じものについて語り、しかも一致しないと言われる発話について、われわれはそれを「意見の不一致」と「意味の不一致」に分けねばならない。例えば、一方が「彼は残酷な男だ」と言い、別の人が「いや、彼はけっして残酷ではない」と言ったとしよう。これは普通の場合には、彼の残酷さについての見解の相違を表わしている。そのときには、「彼は平気で人を傷つける」、等々の彼の振舞いについてのさまざまな報告をすることがその不一致を調停するだろう。だが、もしそうした報告の大部分を共有しつつなお、先の不一致をみたならば、どうなるだろうか。おそらくそのとき、どちらからともなくこう問うだろう。「いったい君は『残酷さ』ということでどういうことを意味しているのか?」。そのとき上の発話はむしろ次のように表わされることになる。「彼のような人を『残酷な人』と言うのだ」、および「いや『残酷な人』というのは彼のような人を言うのではない」。これは「残酷な人」という語の意味

についての不一致に他ならない。最初のタイプの不一致をわれわれは「意見の不一致」と呼び、後のタイプの不一致を「意味の不一致」と呼ぶことにする。もちろん、事例として両者の境界は曖昧にぼかされている。だが、ここで問題にしているのは概念としての異なりであり、そして両者は確かに異なる概念なのである。意見の不一致においては意味は共有され、透明化している。確かに、われわれが意見の不一致を巡って議論をするときには、しばしばそこにおいて意味の不一致が露呈するものであるが、もし純粋に意見を戦わせようと思ったならば、意味については完全に透明化して、共通の了解事項として暗黙の内に沈ませておかねばならない。それゆえ、(概念として)、意見の不一致においてはいかなる記号の内的連関性も問題にはなっていないが、意味の不一致においては、ある記号がいかなる内的連関性のもとにあるのかが問題にされていると言えるのである。

意見の不一致が「合理的」に解消されるときの手続きを一言で述べることは不可能であろうが、きわめておおまかに言えば、それは導出型の説明に依っているだろう。すなわち、相手を自らの見解へと導くように、相手の前提となっている情報や一般法則、および推論過程をチェックし、批判するのである。(もちろん、料理の味についての意見の不一致のように、「合理的」に解消されない意見の不一致もある。だが、いまはこの問題には深入りしない[22])。それに対して、意味の不一致の解消は、問題になっている記号を相手がいま見て取っているのとは別の内的連関性のもとに置くことに他ならず、それはまさにアスペクト的説明になっているのである。それゆえ、意味盲には意味の不一致の解消ということはありえないことになる。また、そもそも意味の不一致の表現は、他の選択肢の存在を前にして各々が自ら見て取っている内的連関性を表明することであるから、明らかに〈…として〉のレベルに属している。かくして、意味盲にはこうした「意味の不一致」が欠けているとされねばならないのである。

以上の考察から、われわれはこう結論する。意味盲が不一致を語るとき、それは記号の不一致か意見の不一致であり、そこには「意味の不一致」という概念が欠如している。そして「意味の不一致」という概念がないのであれば、彼らには「意味の一致」という概念もありえないのである。これに対してあるいは、「不一致がないならば、それはむしろ積極的に一致があることを支持するのではないか」と言われるかもしれない。だがそれはまったくの誤解である。もちろん「不一致がない」ならば、「一致がある」ことになろう。だが、いまは「不一致」という概念がないのであり、それゆえ、「不一致がない」という概念もないのである。かくして、「規則に従うとはわれわれが一致してかく行なうということである」という見解に対して、われわれはこう答えることになる。――「一致」ということを「意味の一致」ととるならば、意味盲の者たちには「一致して」かく行なうこともない。だが、「一致」が「意味の一致」ではないとされるならば、そのような「一致」は規則に従うこととは何の関係もない、と。

結　語

われわれはこれまで、「規則に従う」ことにとって「アスペクト的体験」という概念が中心的役割を果たすことを見てきた。「規則に従う」ことと「たんにかく行動する」こととを概念上分つポイントは、この「アスペクト的体験」にこそ存している。なるほど、ウィトゲンシュタインが言うように、われわれが日常的に計算したり言葉を話したりしているときには、われわれは「規則に盲目的に従っている」だろう。だが、つねにではない。ときに手をとめ、別の可能性に思いを馳せ、逡巡し、決断する。たんに一定の仕方での対象把握、規則遵守に従事するのみではなく、い

かなる仕方でそうしているのかを確認し、場合によってはそれを変更する。すなわち、アスペクトゲームを行なう。「規則に従う」という概念が成立するのも、アスペクトゲームにおけるこうした迷いがあるからこそなのである。[23] それゆえ、ウィトゲンシュタインが「これをひとつの夢と呼べ、それは何も変えはしない」、と主張することによってアスペクト的体験の重要性を否定するのであれば、それは誤りと言わねばならない。アスペクト的体験を一抹の夢と呼ぶならば、まさにその夢の飛沫にこそ、われわれの実践の根が存しているのである。[24]

(注)

ウィトゲンシュタインの著作への言及は本文中に当該個所を記入する形をとった。その際次の略号を用いた。*PU.* I, II.; *Philosophische Untersuchungen.* Teil I, II. (頁数は Blackwell 版による)。*RPP.* I, II.; *Remarks on the Philosophy of Psychology.* Vol I, II. *Z.*; *Zettel.*

(1) N. R. Hanson, *Patterns of Discovery*, 1958, p 10.

(2) cf. 黒田亘、「知覚と動作」、『知識と行為』第四章。守屋唱進、「アスペクトの知覚」、『理想』一九八四年九月号。

(3) cf. 奥雅博、「日常言語分析的アプローチ」、『新岩波講座哲学』、第九巻。ただし奥氏は知覚の理論負荷性理論による解釈はとっていない。

(4) 野矢茂樹、「〈…として見る〉の文法」、『理想』一九八六年一月号。

(5) ウィトゲンシュタインは直接「アスペクト盲はたいしたものを失わない」とは述べていない。だが、このことは次の二点から帰結する。(1)アスペクト盲と意味盲はパラレルな概念である。(2)意味盲はたいしたものを失わない。そして、(2)は *RPP.* I, §202「私が『意味盲』の場合を想定したのは、言語の使用において意味の体験はなんら重要性をもたないようにみえたからである。それゆえまた、意味盲はたいしたものを失わないかのようにみえたからである」、等で直接に確認できる。(1)に関しては、例えば *RPP.* I, §344「『その記号を矢として見よ』ということばを理解できず、使用することを学ぶこともできないような人を私は『意味盲』と呼ぶ」、あるいは、*RPP.* I, §1064「『体験された意味』という問題は、あ

る図形をこれとして、あるいはあれとして見るという問題に類似している」、等において強く支持される。

(6) 本稿では、『心理学の哲学』I、IIおよび *Last Writings*、そして『探究』第II部という、一九四六年から一九四九年までの一連の手稿を基本的にひとまとまりのものとみなしている。それゆえ、『心理学の哲学』にしか現われてこない「意味盲」という用語を『探究』第二部にも適用しうるものと考える。というのも、用語こそ用いられてはいないが、為されている議論に基本的違いはないと思われるからである。とはいえ、『心理学の哲学』の方が先行する手稿であることを考えるならば、これはまさにひとつの用語の削除であり、文献上無視しえない事実である。現在のところ私はこのことに関して何も言うべきことをもっていない。

(7) この個所はさらにこう続いている、「われわれの場合こうした感覚はどのように表わされているのか。——われわれが言葉を選び、評価することの内に」。この部分の重要な意味は、後論において明らかになろう。後に提出する用語を先どりしてあらかじめ言ってしまえば、こうした感覚は「アスペクゲーム」において表明されるものであることが、この個所からも読み取れる。

(8) ウィトゲンシュタインは随所で "sondern" や "weich" といった同音異義語を論じている。cf. *PU. II*, p 214, p 215. あるいは *RPP.* II, § 571.

(9) cf. *RPP.* I, §§ 188-189.

なお、この点に関して、ラッシュ・リーズおよびクリプキには誤解があるように思われる。リーズは『青色本』の序文で、意味盲は色盲や音痴に類するものと述べているが、これはまったくの誤解である。(ついでに言うならば、「音痴」(tone-deaf) は「絶対音感の欠如」(ohne absolutes Gehör) とすべきところであり、その違いはこの脈絡で決定的である)。あるいはクリプキもまた、リーズをうけて、意味盲を頭痛のような、「われわれが語を有意味に使用するときに生じるある種の『感覚』の欠如している者」と解している。そしてここにおけるウィトゲンシュタインの議論が「内観的 (introspective) なものであり、自らに立ち現われてくる体験を調べることに基づくもの」である、と述べる。(S. Kripke, *Wittgenstein on Rules and Private Language*, 1982, pp 46-48)。こうした解釈は、これまで論じてきたことから、意味盲の解釈として不適当であると結論できる。また、黒崎宏氏も、「語に何のイメージも湧かない人」という規定に留まり、われわれが与えたような「アスペクトゲームを為しえない者」という規定には踏み込んでいない。(山本信、黒崎宏編、『ウィトゲンシュタイン小事典』、一九八七年、「意味盲」の項)。

(10) cf. Z. § 399.

(11) クワスとは、そのいずれかの項が五七以上であれば五を答えとし、そうでないときにはいわゆる「足し算」と同じ答えを与える二項演算である。cf. S. Kripke, *op. cit.*

(12) cf. 野矢茂樹、「規則と事実」、一九八五年、『科学基礎論研究』第六四号。

(13) まさにここに重大な問題がある。いったいこのような「重ね描き」はいかにして可能なのか？ というのも、これは反実仮想のような、ひとつの個体に関する別様の思いとは違うからである。同定が異なればそれは別物になるのであり、それはむしろ個体と個体の重ね描きと言うべきだろう。それゆえ、重ね合わせの原理を提供すべき「ひとつのもの」などありはしない。あえて臆見を述べるならば、それは両者の概念ネットワークがもっているある種の同型性によるものであろう。

また、このような「重ね描き」は「行動」と「実践」のみならず、いたるところで見出される。例えば、「手を上げる」と「手が上がる」もそのひとつである。だが、これはいまわれわれが扱っているものではない。この例は意志に焦点を当てているものであり、われわれは規則に焦点を当てている。その点は混同されてはならない。

しかし、われわれはさらに進んで、やがてこうしたさまざまな重ね描きに共通の問題の考察（いわば「一般重ね描き問題」）へと向かわねばならないだろう。なお、「重ね描き」という用語は言うまでもなく、大森荘蔵氏のものである。だが、その問題とするところが同じであるかどうかは疑わしい。こうした問題に対しては思考の熟するのをまって別稿を用意したいと考えている。

(14) より正確に言うならば、（ここでもまた大森荘蔵氏の言葉を借りて）複数のアスペクトが「同一体制」のもとにある、と言えるだろう。意味的同一性が崩れている一方、数的同一性が保たれているのである。とはいえ、その内実はいまだ不明瞭であると言わざるをえない。とりあえずここでは、その「ひとつの個体」が何か「意味ぬきの個体」(!) のごときものではないことのみを押えておくべきだろう。

(15) Nelson Goodmn, *Fact, Fiction, and Forecast*, 1973, 131 pp.

(16) 本節における以下の叙述は、いまだ荒っぽいスケッチにとどまる。意図的行為とアスペクトの問題は他の機会に論じたいと考えている。

(17) この例はアンスコムによる。cf. G. E. M. Anscombe, *Intention*, 1957.

(18) Alice Ambrose, *Wittgenstein's Lectures Cambridge* 1932-1935. Part 1, § 35.

(19) アンスコムの分析が正しいならば、「理由」という概念がないということの重大な帰結として、意味盲には意図的行為の概念が適用できない、ということが出てくる。意図的行為が為しえないのであれば、「規則に従う」ということもありえないのは、言うまでもないことである。

(20) この「無意味な記号に転ずる」というポイントのゆえに、計算間違いは誤解と異なり、知覚の場面に対応するものをもっていないと言える。というのも、知覚の場面では意味をもたぬものなどないからである。(たんなるわけのわからぬ図形でも「たんなるわけのわからぬ図形」という意味をもっている)。

(21) 「規則に従う」ことと「一致」ということとの関連にスポットを当てたのはクリプキであった(前掲書)。だが、クリプキの考察は両者の概念上の連関を明らかにしたものとはとても言えないものである。(クリプキに対する批判として、野矢、前掲論文参照)。

(22) こうした意見の不一致の解消については、別の脈絡でクリスピン・ライトが与えているラフ・スケッチが興味深い。ただし彼は意味の不一致については何も論じていない。Cripsin Wright, Inventing logical necessity, pp 198-201. in J. Butterfield ed., *Language, Mind and Logic*. 1986.

(23) アスペクトゲームがありえないならば、通常ゲームに対する描写は必然的に行動描写となる、というのが本稿の結論であるが、ここで次のように問うていきたくなる気持ちを禁じえない。では、逆はどうか。アスペクトゲームがあるならば、通常ゲームに対する描写は必然的に実践描写になるのか。与えたい答えはもちろん、イエスである。だが、アスペクトゲームでさえ、結局のところ行動描写を与えることが可能なのではないか。たんに因果的な反応の系列としてアスペクトゲームが成り立っているとしたらどうか。いったいそのような想定には意味がないのだろうか。この、いっさいを「行動世界」の中に押え込もうとする問いは、いわば、「実践に対する懐疑論」である。しかもこの懐疑論は認識論的な懐疑論ではなく、概念の成立に対する懐疑論に他ならない。われわれは、実践描写に含まれる諸概念の連関を分析してきた。だが、ここで懐疑にさらされるのはその実践概念ネットワークのすべてなのである。この懐疑を前にして、われわれはあたかも概念の根拠付けを求められているかのように見える。だが、そもそもそれは不可能な試みであろう。ここで為されるべきは、懐疑そのものの分析であると思われる。その作業はさらに考察を加え、他の機会に行ないたいと考える。

(24) 本稿の執筆にあたり田島正樹、武笠行雄氏とのディスカッション、および北海道大学哲学科における非公式のディスカッションに多くの示唆を受けた。また、飯田隆氏には原稿を読んでいただき貴重な質問と示唆をいただいた。